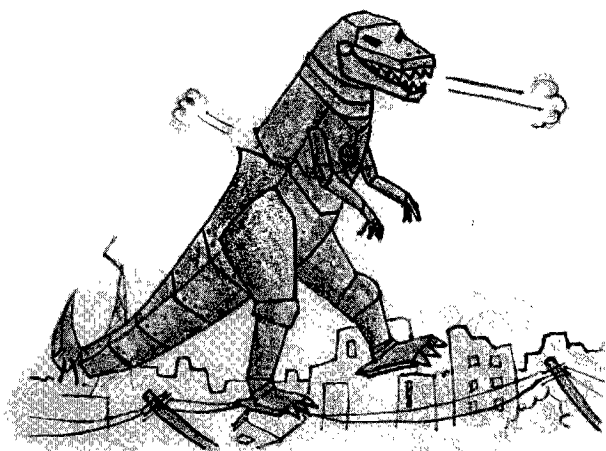


# SE

## の知恵袋

# 第18回 作りたがるSE

三井一夫 三井金属鉱業(株)  
妹尾稔 名古屋商科大学



絵 細田直子

## パッケージブームは本物か

ひと頃のERPブームを反映してか、このところ日本の企業システムの世界でもパッケージソフトがあちこちで話題となってきた。しかしパッケージソフトといってもピンからキリまでである。テレビCMで派手に目を引くPCレベルの財務会計ソフトや給与計算ソフトから、企業全体の経営管理システムを飲み込んでしまうほどのいわゆるエンタープライズ(企業全体)レベルのものまでさまざまなものがある。ここで取り上げるのはどちらかという企業全体をカバーするERPパッケージのことである。

## 自前主義の日本

汎用コンピュータ花盛りの頃(1980年代)は、企業システムといえばIBMを筆頭に国産コンピュータ4社(富士通、日立、日電、東芝)の独壇場であった。企業も競って大規模なバッチ、オンラインシステム構築に取り組んだ時代でもあった。ちょうどこの頃である、当時通産省が「1990年には60万人のソフトウェア技術者が不足する」というふれ込みで、ソフトウェア技術者育成の施策やΣ計画を立上げ、産業界や教育界もその実現に大きな期待を抱いた時期であった。

さてこの頃のパッケージソフトウェアといえば、投資採算計算やシミュレーションプログラムのような基幹部分の業務ではなく、個別専門分野のものが中心であった。これらにしても国産メーカーのものよりも、外国メーカーのものが大半であったと記憶している。

やはりこの頃のシステム部門の意識には、自社の基幹システムは自前で作るというのが疑いのない定説で、パッケージソフトでカバーできるとは頭の片隅にもなかったであろう。いやなかったというよりも、これだけ自分たちが苦勞してもユーザからは十分な満足感を得られないのに、よもやパッケージで応えられるはずがない。もしできたとしてもそれはアメリカやヨーロッパのような企業文化を持った世界での話だと思っていた。同時に日本という国にはパッケージソフトは馴染まないだろうと情報システム部門の大半の人間はそう思い込んでいた。

## 技術変化の早さに右往左往するシステム部門

このような時代から今日の時代までの情報システムを支える基盤技術の変化と発展に目を向けてみる。

### (1) システム形態をみると

汎用機中心/クライアント・サーバ型/分散・ネットワーク型。

### (2) OSシステムでは

IBMを頂点とした汎用機OS/UNIX/Windowsシリーズ、

Linux.

### (3) PCソフトの充実

汎用機を凌駕するMS Officeの台頭.

### (4) インターネットの普及

想像をはるかに超えたスピードで普及.

これらの変遷は誰もが認めるところである.

一方企業内の情報システムが抱える問題もさまざまなものがあり、このような基盤技術の移り変わりとは無縁ではない.

(1) これまで、情報システムはバックヤード的な位置付けであったが、現在は事業・ビジネスと表裏一体のものとなり、必然的に表舞台に出ざるを得なくなった.

(2) 経営意思決定のスピード化はますます高まり、それに呼応するシステム化も早期実現が非常に重要なキーワードとなってきた.

(3) 企業システムにとって、固有技術の変化をいかにうまく取り込むかも大きな重要ポイントである.

これまでの企業の情報システム部門は、汎用機全盛時代に構築した恐竜のようなシステムを、基盤技術の進歩・変化に羨望を抱きながら、かつ経営サイドからの諦めにも近い叱責にもじっとこらえながら、その恐竜を養ってきたというのが素直な見方である. すなわちこれまで部分最適(最適であったかどうかとも疑わしい?)の寄せ集めシステムできたつけが一気に噴出したと言わざるを得ない.

## ERPパッケージは救世主となるか

さてここで冷静に読者の皆さんに問いたい.

「このようなコンピュータを取り巻く基盤技術変化のスピードの早さと経営からの逃げ場のない要求を抱えて、企業システムをいかに構築するのか?」と.

筆者はパッケージソフトの活用が最良の解決策の1つだと考えている. もちろんここでいうパッケージは前述の通りERPパッケージのことである.

しかしながらここで一番厄介なことがある. それはERPパッケージ導入にあたって最も抵抗する勢力が何と“情報システム部門”なのである.

ではなぜ情報システム部門がERPパッケージ導入に反対するのか考えてみた. 1つは自分たちの存在を否定されると勘違いしている. 2つ目は自分たちがこの何十年取り組んでもできなかった企業全体の統合システムが、パッケージでできるわけがないと思っている. この2つが最大である.

## 抵抗する守旧派になってしまうのか

ここで具体例を出してみると、著者がERPパッケージにかかわった際、数十の企業とERPパッケージ導入につ

いて話し合ったその中から非常に象徴的なやりとりを紹介する.

情報システム部門の人から聞かれる最も多くの言葉は、

①うちの業務は非常に特殊である.

②うちのシステムは非常にきめ細やかに対応している、だからパッケージではたぶん無理だろう.

③うちの現場は絶対に言うことを聞かない、ということが大半であった.

まず①の“うちは特殊だ”については、「特殊というのは何が特殊なんですか?」と質問すると、「うちは取引形態がさまざまあり、また決済基準もさまざまである(単なる一例)」という答えが返ってくる. 「でもそれってどこの企業でも当たり前ですよ、ERPパッケージでも当然対応していますよ」と大体この程度の繰り返しで、ほとんど問題なく解決するものばかりであった.

次に②の“うちはきめ細やかに対応している”については、「よくできたシステムは結構なんですが、購買システムと会計システムとのつながりはどうなっていますか」と質問をすると、「それは購買システムの月次締処理をした後に会計データを作成して会計システムに渡しています」と、「それでは月中は会計システムでは仕入先の買掛金残高が正しく分かりませんね」、「でも経理の人は月中は購買システムの買掛金発生と経理システムの買掛金残高との両方で管理してますから問題ありません」といったくだけりである. これでは統合システムの話を持ち出すどころの騒ぎではない.

また必ず出てくるのが③の“うちは現場の声が強くて、とても画面の形が変わるなんて言えない”というのがある. しかしこれもよく考えてみればおかしな話である. セットアップ情報システム部門が自己の存在を主張できるチャンスを自らの手で、ミスミス潰してしまう姿はもはや同情の気持ちすら失わせてしまう.

## 作らないSEになろう!!

また思い切ってERPシステムの導入を決断しても、残念ながら失敗している事例も非常に多くあるのも事実である. それらの多くはERPパッケージソフトをあくまでも開発ツールとしてとらえてしまい、結局は開発という形で余計なものを作ってしまう残念な実態がある. このような情報システム部門やそれに迎合してしまうコンサルタントの責任は非常に重いと思う.

ここではつきり言おう.“作りたがるSEになるなど”. 少なくともSEとしての価値は決して作ることが目的ではなく、利用者(要求者)に対して価値ある仕組みを提供することであるし、作らなくても自己の存在を高めるその方法はあると信じている.

(平成13年7月26日受付)